【62】

氏　名（国籍）	徐　東周（韓　国）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　甲　第　4202　号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**移動と想像力** －中野重治・帝国・視差－

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	浜　名　恵　美
副　査	筑波大学教授		名　波　弘　彰
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	宮　本　陽一郎
副　査	筑波大学助教授	博士（文学）	吉　原　ゆかり
副　査	京都教育大学助教授	博士（文学）	日　比　嘉　高

論文の内容の要旨

本論文の目的は，「プロレタリア文学」というジャンル規定の下で，主に思想史・運動史・文壇史の立場から読まれてきた中野重治文学に関して，〈移動〉のモチーフが最も頻出している昭和初期のテクスト群をとりあげ，その文学的想像力と移動の関連を明らかにすること，さらに中野重治が方法化した移動を通して創り上げた「文学」のありようを明らかにすると同時に，それについて批判的に論じることである。

本論文の構成は以下のとおりである。

序章
第一章　定住者のいない満州／「逞しき」朝鮮人
　　— 中野重治「モスクワ指して」における植民地表象をめぐって —
第二章　中野重治における朝鮮の心象地理
第三章　一九二九年，「内地」で呼び起こされた一九二三年の「京城」
　　— 中島敦の「巡査の居る風景」の表象する植民地 —
第四章「春さきの風」の政治学
　　— 「三・一五事件」の表象をめぐって —
第五章　詩「雨の降る品川駅」における重層化された「移動」
第六章　競合するジャンル・越境する作家
　　— 中野重治と片岡鉄平の越境と創作実験 —
結章

序章は，先行研究を批判的に検討し，この分野の研究が抱えている問題を検証し，移動しない作家・中野重治が長距離を移動する主人公を描いたテクストを産出した文化的背景および中野が駆使した視点の移動という戦略の意義をいかに分析すべきかを検討している。

第一章は，植民地朝鮮の独立を実現するため満州を横断してモスクワに向かう二人の朝鮮人を描いた「モスクワ指して」（『無産者新聞』1928年）をとりあげ，朝鮮と満州が帝国の〈内／外〉と表象されていることに注目すると同時に，満州を徒歩で移動できる「逞しき体力」は在日朝鮮人土木労働者の表象を採用しており，このテクストが日本の朝鮮支配を批判しつつ人種的偏見の再生産にも加担しているとする。

第二章は，弟に会うために東北から鶴見に向かう女性を描いた「停車場」（『近代生活』1929年）の中で語り手は東北方言を標準語に翻訳できない事実を通して方言の他者性を見出しているが，「モスクワ指して」では二人の朝鮮人の会話に関して朝鮮語の他者性に触れていないことに注目し，中野の知り合いの在日朝鮮人が標準語に近い日本語を駆使し社会主義思想も共有していたこと，また朝鮮と北海道を天皇制国家の追放地と考えていた中野が朝鮮を帝国の中央から区別される「外地」としても捉えていたことを明らかにしている。

第三章は，「雨の降る品川駅」（『改造』1929年）と中島敦の「巡査の居る風景」（『校友会雑誌』1929年）を比較し，二編が，内地では日本人の民族の象徴として外地では異民族統合の象徴として機能した天皇制の両面性を鋭くとらえ，同化の不可能性に関しても認識を共有しているものの，植民地朝鮮の未来に関して，中野は朝鮮人の口を借りて「独立」「民族解放」の夢を提示しているが，中島は留保的であるとしている。

第四章は，「春さきの風」（『戦旗』1928年）が政治的弾圧事件（三・一五事件）を家族崩壊事件として表象していることに着目し，天皇と国民を「家長」と「子」の関係と捉えた家族国家論に対する批判を読み取り，抑制された作者の政治的〈声〉は個の悲劇を集団的悲劇の例として扱った当時のプロレタリア文学の表象の仕方に対する批判であり，中野はプロレタリア作家でありながら，プロレタリア文学を相対化する視点を提示したとする。

第五章は，「雨の降る品川駅」の生成の問題を扱い，まず当時の神聖化された天皇像に対して「猫背の彼」といった世俗的な天皇像を対置して天皇表象を複数化・相対化する点に着目し，次に「モククワ指して」から「雨の降る品川駅」への連続性に関して，帝国の外に向かって移動する朝鮮人という設定に注目し，この設定は帝国日本の排外主義を意味し，それによって帝国の他者としての朝鮮人表象が浮上しているとする。

第六章は，プロレタリア文学，モダニズム文学，大衆文学が激しく対抗していた昭和初期の文壇において，片岡鉄平の同様の活動にも触れつつ，競合するジャンル間を移動した中野の文学活動に焦点を合わせ，こうした作家の越境は，ジャンル間区別を超え複雑に交差していた，当時のモダンをめぐる言説の布置を浮き彫りにしているとする。

結章では，第一章から第六章までの成果をまとめ，さらに今後の展望を述べている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文が研究対象としている中野重治文学は，従来，「プロレタリア文学」という枠組みの中で議論されてきた。本論文は，「プロレタリア文学」としての中野文学を否定するのではなく，「方法としての移動」という観点から，特にポストコロニアリズム及びカルチュラル・スタディーズの理論と方法を駆使し，植民地の問題を筆頭として，プロレタリア文学としての中野文学のかかえた重層性を新たに解明した充実した研究である。本論文の著者は，中野重治文学において頻出する多様な移動 ―〈ヒト〉や〈モノ〉の移動，作者の政治的立場の移動，他者への眼差しの移動等 ― を，中野が文学上のテーマを追求するために意識的に採用した方法と措定し，中野重治文学は「方法としての移動」を「他者に同化する視差し」から読み直されねばならないという立場にたっている。本論文の各章の論述は一貫してこの立場から分析され，また，その分析と考察の結果もこの著者の立場を支持するものとなっており，全体としてまとまりのある論考となっている。

本論文が示した独自性は，「方法としての移動」と「他者に同化する眼差し」という概念を導入し，プロレタリア文学の枠を超えた，中野重治文学の新しい重層的な読みを提示したことである。この二つの方法概念は別個に運用されるものではなく，前者は運動概念であると同時に，たとえばブルジョワ／プロレタリア，天皇／国民，地政学上の中央／地方，標準語／方言（朝鮮語），帝国／植民地などの間の偏差の虚構性を解体・相対化する脱構築の方法でもある。また後者は視点の移動として前者の偏差のうち，他者として認識される劣位項に中野自身の眼差しを据えることで，優位項の虚構性・欺瞞性を暴露する戦略概念であり，前者の脱構築の方法と重なる。

本論文は，これらの二つの方法概念を，中野文学がかかえこむ政治，社会，文化の偏差に一貫して適用し，そこに浮上する問題性を新たに検討した力論である。特に第五章の「雨の降る品川駅」の生成の分析は見事である。この点は高く評価できるが，本論文にはいくつかの欠点がある。まず，三章の考察にはやや不十分なところがある。さらに，十分とはいえない論理展開がないわけではない。しかし，このような限界は，著者の今後の研鑽に期待すべきものであり，中野重治文学の読み直しとして本論文の挙げた成果は学位論文として十分な水準に達しているものと判断される。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。